**№52　テーマ『新しい時代をつくる』**

**講話日2011年7月4日**

**皆さんこんにちは。蒸し暑い日がずっと続いていまして、外でお仕事をされる方は本当に大変だと思いますが、健康に気をつけて頑張ってもらいたいと思います。今日のテーマは「新しい時代をつくる」ということでお話をさせてもらいたいと思います。こういった大災害があって、これからは“ただ復興”ということだけではなくて、どのように新しい環境、土地の活用など、東北地方においては、どのような社会をつくろうかということは非常に大きな課題になっていると思います。東北地方だけの問題ではなくて、これを契機に全国的に新しい時代というものをどのようにしてつくっていったら良いのか、ということを政治だけではなく、経済の面でもいろんな意味で“これからの日本の未来”を考える上で大きなテーマになってくると思います。そういったことを踏まえて、今日は「新しい時代をつくる」というテーマでお話をさせてもらいたいと思います。**

**「我々は一体何をするためにこの世に生まれてきたのか」ということなんですが、これは誰でも何回かは人生において自分自身に問う問題かと思います。「我々は一体何をするためにこの世に生まれてきたのか」、「自分がこの時代に生まれてきた意味はなんなのか」、そういうことを何回か問うたことがあるかと思います。原理的に言って、すべての人に共通する出生の理由というのは、歴史をつくるため、新しい時代を呼び起こすために我々は生まれてきたんだと考えることができます。もちろん、これはいろんな答え方、答えがあると思うのですが、すべての人に共通する出生の目的・意味・理由というのは、歴史をつくるため。それが人間が生まれてくる根本だということができます。簡単に言うと、生まれてくる人間が亡くなってしまえば、歴史が終わってしまうこともあります。そういう意味では、生まれてくるということは、命を先に繋いでいくこともあって、確実に生まれてくることによって歴史・時代は一歩前に進む…という流れが形成されていくわけです。その意味からも我々は歴史をつくるために生まれてきたということができる。**

**歴史をつくろうと思ったら、過去の人間が誰もやったことのないことをやらないと歴史はつくれないんですよ。過去の人間と同じことをやっていたら、歴史は停滞するわけですよね。歴史をつくる=変化をつくり出すということはできない。そういう意味では、歴史をつくるためには、過去の人間が誰もやったことのないことをやらないと歴史はつくれないんですよ。そうでないと、新しい時代を呼び起こすことはできない。だけども生物学的に考えると、生まれてくる子どもは誰でも、過去の人間が誰もやっていないことをすることができる、そういう可能性を能力に秘めて生まれてくると言えます。これはどういうことなのかと言うと、生まれてくる子どもというのは両親から遺伝子をもらって生まれてくる。過去の人間のふたり分の可能性を一身に受けて生まれてくる。子どもというのは生まれながらに親を超えて生まれてくるんだ、ということです。いつの時代でも「今の若い者は…」と言って、大人たちは常に若者に対して頼りないという悲観的な考え、批判をするわけです。だけども、歴史を振り返るとそんな若者たちが確実に大人たちがまだ見ぬ未来を見据えて、実現して、大人たちを超えて時代をつくっていったのが、歴史であります。**

**では、一体なぜ若者たちは確実に、常に大人たちを超えて、まだ見ぬ未来をつくり続けてこれたのか。それは先ほど申し上げたように、生まれてくる子どもというのは、生まれながらに過去の人間のふたり分の可能性を一身に受けて生まれてくる。両親から遺伝子をもらって生まれてくる。とは言え、両親から遺伝子をもらって生まれてくるだけでは、未来をつくる力はありません。なぜな**

**ら、遺伝子は過去のものだから。なぜ、子どもたちは過去の人間がまだ見ぬ未来をつくり出せるのか。それは、命というのは有機体であって、両親からもらった遺伝子が足し算ではなくて、命の中で有機的に絡み合って、相乗効果として湧いてくるのがその子の力なんですね。相乗効果、シナジー効果ですから、だから過去になかった全く新しいものが出てくるという理屈、構造に命はなっているわけです。我々は皆、過去の人間が誰もやっていないことをすることができる、そういう可能性を能力に秘めて生まれてくると言えます。**

**いつの時代でも子どもたちは常に過去の人間が誰もやっていないこと、今ないものをつくり出して世に送り続けながら、一歩一歩確実に未来に挑戦していく生き方をこれまでもしてきたし、これからもしていかなければならない。時代というのは常に時間の矢・流れに従って、常に前に向かって動いているというものです。だから我々は、そういう時代の流れの中に生きている限り、やはりいつでも今よりも何か素晴らしいものをつくり出していこうという意欲を持っていないと、時代の中で価値ある生き方をできない。新しいものを生み出し続ける、より素晴らしいものをつくり出し続けることをしなければ、結局保守化してしまって、時代の要請に応えられない、時代の役に立たない、そういう人間・会社になってしまう。人間も会社も常に、過去になかった新しいものをつくり出し続け、世に送り出し続けることが、会社が存続し、発展し、利益を上げ続けていくための重要な課題であります。**

**建築においても、常に何かしら10年前にはなかった家の構造や機能、建て方そのものなどをつくり出すことが求められるかと思います。その中で働いている皆さん方は、常により素晴らしい未来への提案をすることが、この時代において自分自身が生まれてきて仕事をする価値・意味になってくるわけです。とにかく生まれてきたからには、何かしら自分も過去の人間が誰もやっていないことをやるんだ、という思いにならなければならない。建築業という仕事をしている限りは、この仕事において何かしら過去の人間が誰もやっていないことを自分も提案して、実践して、業界に貢献する、業界の歴史をつくる…ということを意識しながら皆さんは仕事をしていかなければならないと思います。とにかくまず、現在の生き方としては、この時代に生まれてきたからには、過去の人間が誰もやっていないことをこの仕事において何かひとつは行なって、この会社・時代に貢献し、新しい時代・歴史をつくる生き方に自分自身が役立っていく…そう考えながら生きていって欲しいと思います。**

**時代はいつでもそうなんですけど、今の時代というのは前々からお話していることではありますが、西洋の時代から東洋の時代へと大きな転換が起こっています。それから、理性の時代であった近代から、次の新しい時代である感性の時代へと精神原理が移行していく流れの中にあります。これは、ただの変化ではなくて、時代は原理的変革を求めている。ただより良い変化をつくり出す表面的なアレンジメントではなくて、原理から全く新しくしていく。そのことが求められている時代の中に我々は生きているということです。そういうことを考えると、一体どのようにすれば新しいアジアの時代に対応する生き方、あるいは建築業という業界の新しい在り方をつくり出すことができるのか。また、自分自身の生き方においても、原理的変革という全くこれまでとは違う新しい意識を持った生き方をしていくことが求められる。その“全く新しい生き方”というのはどういうものなのかと、問うていかなければならないわけであります。**

**そのためにまず我々に求められることは、新しいものをつくり出す創造力が能力としては大事に**

**なります。新しいものをつくり出す能力というのは、どんな人でも生まれながらに命に秘めているもの。だけども、誰もが過去の人間が誰もやっていないことを現実的に発揮しているわけではない。とは言え、可能性があるんだから誰でもその気になれば、過去の人間が誰もやっていないことをやって、自分らしいことを成し遂げて生きて死んでいけるはずなんです。こういったことを現実的にどのようにすれば顕現させられるのか。自分がこの時代に生まれてきて、新しい時代をつくることに関わるような活動、創造的な仕事・生き方をどのようにすればできるようになるのか。その方法論を知らないと、せっかく生まれながらに秘めているのに顕現せずに生きて死んでいくのは、非常にもったいない、残念なことです。**

**創造的な仕事をするためには、どのようなことが大事なのか、どうすれば過去の人間が誰もやっていないことをすることができる力を引き出し、そして自分自身がこの時代の中で価値ある生き方をする、名を挙げる、人から注目されるような存在感のある人間になれるのか。そのためには具体的に何をすれば良いのか。このことを考えていかないといけません。そういう意味で、創造的な仕事をするために大事な原理がふたつあります。**

**創造力をつくる上で大事なことは、常識“で”考えていては何も変わりません。創造力をつくるには、常識“を”考えること。これを意識すること、実践していくことをしないと、自分の命にある過去の人間が誰もやっていないことをすることができる力が顕現してこない。常識で考えるのではなく、常識を考える。常識を考えるとは、「これはこうするものだよ」と言われたら、例えなんの疑いが無くてもそこに疑問を持ち、「本当にこのままで良いのか？」と問うてみる。「そうは言われても、果たしてそうだろうか？」と。どんなに確かそうに見えることでも一度は「本当にそうなのか？」「このままで良いのか」と言ってみる必要があります。問うてみると、それはこのままで良いわけがないですから、ではどうしたら良いかを考える。そのことによって、我々は常識から支配される状態から脱却できるわけです。常識で考えるのではなく、常識を考える方法は、自分自身を固定観念・先入観念から解放させる。固定観念・先入観念に支配されている意識を解き放って、創造的な発想を行わないと、原理的変革という創造はできません。常識を考えるということを哲学の原理では方法的懐疑と言っています。近代哲学の祖と言われるルネ・デカルトが、封建時代の社会から新しい近代の社会へ変革を成し遂げなければならない状況の中で考え出した方法であります。それが方法的懐疑。別に疑わしくはないんだけど、新しいものをつくり出すための方法論として疑ってみる。その実践、やり方なんですね。これがいわゆる原理的変革が求められている時代において、我々が実践しなければならない力を自分の命から引っ張り出す方法論であります。**

**皆、創造、創造と口にして創造的な仕事がしたいとか、創造力がある人間になりたいと言いますが、なかなか本当に原理的創造、原理的変革と言われるようなものを発揮できない。今自分の持っている力でしようとするから、だから創造できない。今自分の持っている力というのが、常識であり、固定観念・先入観念ですから、それらで新しいものをつくろうとするのは無理です。新しいものをつくり出そうと思ったら、まず原理的に自分自身の中にある固定観念を破壊しなければならない。先入観念を取り除かなければならない。常識に支配されない自分というものをつくらなければならない。常識、固定観念・先入観念から自分を解放する。そういうことのために使う方法が、常識を考えるというやり方です。だから、あらゆる事柄に対して「本当にこのままで良いのか」という問いを発するわけであります。「このままで良いのか」と問うてみると、それはこのままで良いわけがないですから、そうすると自然と意識が芽生えてくる。**

**今から100年前は明治維新でした。そこから100年経つと、あらゆるものが、がら～っと変わってしまった。まだ和服を着た人が多くて、ちょんまげの人もいて、うっかりしたら刀を挿している人もいたり。そんな時代が100年前で、今となってはこんなに変わってしまった。姿、形、機能を変え、全く想像もできないような変化をつくり出す…これが歴史の力です。これから100年もそういう変化が社会の中に出てくると考えないといけないわけであります。確実に変化というものが時代の力によってつくり出される。それも全部その時代を生きた人間がやったことなんですよね。そういう意味では、我々もただ表面的な変化だけではなく、原理的に物事を変革させていかなければならない。今は、近代から新しい時代へと時代そのものが大きく変わろうとしている。そんな数百年に一回のスパンの変化がやってこようとしている。それを我々は成し遂げていかなければならない。そのために我々は固定観念・先入観念から自分を解放し、常識に支配されない自分をつくることが非常に大きな課題であります。この建築業界においても誰が原理的に変革して、新しい時代のリーダーとなっていくのか。これは会社の在り方から考えても大きなテーマです。家の形も構造も時代の変遷と共にいろいろと変わってきているわけですよね。その意味では家の在り方も原理から変えていくことも考えないといけないわけであります。**

**一体、家の在り方を原理から変えていくとはなんなのか。そのためには家に対するいろんな意味での固定観念・先入観念をまずはぶち壊さないと、新しい時代の家の在り方を発想するという力が出てこないわけです。とにかく、自分の身の回りにあるもので全てこのままで良いというものはない。あらゆるものに全部何かしら変化を与えていかなければならない、全部変えていかなければならない。これが時代の要請なんですよね。建築で言えば間取り、家具、道具も全部新しい時代に合った変化をつくり出していかないと、新鮮味もないし、他社と同様では競争に勝てません。何かしら「この会社の提案は違うな」と思わせる驚き、サプライズをお客様に提供することが要求される。そのことによって選ばれる会社になっていくことができる。変化をつくり出すことは本当に仕事上、大事なテーマであると考えないといけません。全ての人がいろいろな家に住んでいるわけですから、自分の生活実感から全社員が何かしらアサヒグローバルという会社に提案をすることが可能なんです。もっともっと具体的に会社に対して自分の住んでいる家を通して出てくる要求、実感からくるものを提案していかないといけないと思います。社員の提案を具体的に建築の中に取り入れていくことによって、他社にはない独自の発展を成し遂げていくことができるわけであります。大学や研究施設にて出されたデータを取り入れて仕事をしている会社もありますが、社員から出る提案には社員の個性が投影されている。その社員は他社にはいないわけですから、そういう意味で自社の社員からの意見をどんどん形にして、そして建築に新鮮味を与えていくことが個性豊かな会社になっていくということに繋がっていきます。そんなことは言われなくてもやっていらっしゃることかもしれませんが、もっともっと激しい変化というものを今、時代は求めていて、変化に飛びつくか、サプライズするかという判断が求められています。**

**とにかく、常識を考える。固定観念・先入観念から自分を解き放つ。これが非常に大事な方法論だと言って過言ではありません。だけども、あまりにも常識を考えることをし過ぎると、変な人間に思われる可能性もありますので、あまりそんなことばかりではいけませんので50%くらいは常識に従って、あとの50%は変革をつくり出すために常識を考えるということをやってみる。そういう両面が必要ですね。とは言え、原理的変革の時代においては、常識を考えるという対応を心掛けてやっていくことが、非常に大事な課題であります。とにかく、我々の命の中にある過去の人間が誰もやっていないことをすることができる、そういう可能性を能力に秘めていることを顕現させるためにはどうしたら良いのか。その第一番目の方法は、常識を考えるということ。**

**もうひとつのやり方は、現実への違和感、感性への実感を大事にする。これも自分の命の中に潜在する創造力を引き出して、現実に使えるものにしていくための重要な原理です。現実への違和感というのは、仕事をしながら、生活をしながら、「ここのところおかしいな」「ここのところ納得できないな」と感じるもの・こと。そう感じるということは、「おかしいと思ったことをおかしくないと思える状態に変えていく」ためにこの時代に生まれてきたんだ、ということを教えてくれている現象なんです。間違っているのでは、と感じるものに対しては、間違っていないと感じる状態へ変えていくために、気づかせてくれたということ。「君がこの時代に生まれてきた使命なんだ」ということであります。それをすることで、この時代に生まれてきた出生の本懐を遂げられる。そのことを天が、時代が、自分に教えてくれている。例えば、「ここのところなんとかならんかな」と感じていることがあれば、それは「君こそまさにもっと便利にするためにこの時代に生まれてきたんだ」。この時代に生まれてきたから、そういう問題に出会うことができたんだ。納得できないものを納得できるレベルにすることが、この時代に生まれてきた自分の仕事。それが使命なんだ。そういった現実への違和感を大事にすることによって、我々は自分の命にある過去の人間が誰もやっていないことをすることができる力を顕現させられる。**

**だけども、多くの人がそう思いながらも「まぁ、いいか」「誰かがやるさ」と自分はやらないで、素通りしてしまっている。「面倒くさい」「厄介なことはごめん」という怠け根性もあって、見過ごしてしまう。これが残念ながら、その人がその人に与えられている使命・仕事に出会いながらも掴み取らないで、見過ごしていってしまって、平凡な人生に終わってしまう理由であります。本当に何かしら存在感のある仕事をし、存在感のある人になって、価値ある素晴らしい人生を生きて終わりたいと思う人間であるならば、現実への違和感というのは見過ごしてはならない。現実への違和感こそ自分に命の使いどころ、使命を与えてくれる現象なんだ。実際問題、世の中には発明発見という仕事をしている方がいらっしゃるんですけど、そういう方は皆、現実への違和感に挑戦するんですよ。「ここのところなんとかならんかな」と感じたとき、「俺がやってやろう」という気持ちでその問題にぶつかって、のめりこんでいって自分が納得できるところまで変化をつくり出していく。そういう創造力を発揮していかなければならない。現実への違和感において大事なことは、何かしら現実に存在するものに対して納得できない、もう少し便利にならないだろうかという気持ちになるというのはどういうことなのか。自分の持っている潜在能力が今存在するもののレベルよりも成長していないとそうは思わないのです。自分の持っている潜在能力が今存在するものと同じレベルなら「これで良い」と満足する。また、自分の持っている潜在能力が今存在するものよりも劣っていたり、遅れていたら「なんと素晴らしい」と感動する。しかし、感動も満足もしない場合は、自分の持っている潜在能力が今存在するものよりも成長しているということ。そうでないと、「ここのところなんとかならんかな」「納得できないな」とは思わないし、そういう問題意識は出てこない。**

**ということは、現実への違和感という問題意識を持つことができたのは、すでにその人の中に現実に存在するものを変化させ、時代を動かし、歴史をつくるという力があることを証明しています。「ここのところなんとかならんかな」と感じ、現実への違和感を感じるということは、自分の持っている潜在能力が今存在するものよりも成長しているということ。だから、「俺がやってやろう」と感じ、思った方は潜在能力があるのだから、確実に自分が納得するところまでは時代を動かせる、歴史をつくれる。その力がその人にあることが証明されているんです。もっともっと仕事、実業の中で現実への違和感というものを感じて、利用して、そして歴史をつくるために生まれて**

**きた自分の人生を形にしていくという生き方をしないといけません。**

**これは特別な人しかできないことではないんです。皆、すべての人が自分の命の中に過去の人間が誰もやったことのないことができる力を潜在して生まれてきています。だけども、それが秘められたままでは無きに等しい。それをどうしたら引き出して、自分の人生の中でつくり出すことができるか。そのためには、常識を考えるという方法と、現実への違和感という感性の実感、このふたつのことを我々は真剣に取り組んでみることが必要になります。この方法さえ用いれば確実に仕事の上においても多大な成果を出すことができるし、勤めている会社を個性ある、存在感のある会社として発展させていくことにも貢献できます。とにかく、会社が個性の時代に対応した会社、同業他社とは違うぞと、そういう会社になっていくためには社員の提案を形にしていかないと個性ある会社にはなっていきません。こういうことも全社員が自覚していないといけないことなんです。他社と同じことをやっていたのでは差別化ができないということなんです。また、学問的に研究されていることを取り入れてやっていたのでは、他社と同じなんです。業界中がそれを受け入れていくのですから、全く同業他社との違いが出てこない。同業他社との違いを出す唯一のことは、社員の提案にある。なぜなら、その社員は他の会社にはいない社員ですから。我が社にしかいない社員なのですから、その社員の提案を会社の個性というものをつくり出す最も現実的で原理的な力であります。そういう意味でももっと「この会社に入ったのなら…」アサヒグローバルをもっと素晴らしい会社にするにはどうしたら良いか？ という思いでいろんなことを提案していく…そういう仕事の仕方、生き方をもっと激しくやってもらいたいと思います。**

**とにかく今の時代は原理的変革が求められている。いろんな面において原理的変革をやっていかなければならないわけであります。では、現実的にどうしたら良いかを考えていきます。とにかく今、政治は大混乱の中です。国民の目から見たら常に与党野党が言い争って、醜い人間性を政治家が見せている。そして、政治が空転してなかなか具体的な政策が現実的に実践されない。法案が通らないものですから、混乱したゴタゴタした状態にある。そういう意味でも政治も原理的変革が求められている時代に入ったんだと我々は意識しなければなりません。政治を変えようと思ったら国民が政治意識を持って、どう変えたら良いか、どう変わってほしいかを意思表示しないと政治家たちは今の自分の権力というものを手放したくないから、自分自身を変革しようという思いにはなかなかなりません。国民が要望を突きつけることによって、現実の政治というのは、その国民の要望に応えるという形で変わっていくという力が出てくるわけです。政治家に任せたらなんとかうまくやってくれると思ったら、なんにもならないのですよ。常に時代というのは、市民の現実に対する不満・批判が、時代を変えるという大きな役割を果たすわけであります。**

**エジプトでもイラクでもシリアでも、とにかく国民・民衆の活動によって政変が起こり、権力がひっくり返るということになるわけですから。我々自身がどういう政治を望むのか、ということを具体的に考えていって、我々が望む時代をつくる。我々が納得できる政治をつくる。そういう活動を我々はしていかないといけない。そういう使命がこの時代に生きる人間にはあると思うんですよ。「俺は政治に関心がないから勝手にやってくれ」では、本当に自分が納得できる社会はできない。いつも不平不満ばかり言うだけ。自分が納得できる社会というのは、自分自身がつくり出す。そういう主体的で、積極的な人生というものになりませんから。とにかく今は、近代から次の新しい時代へと、そのものが原理的に変わろうとしているんだから、今こそ国民が立ち上がって、そして時代をひっくり返して、我々が本当に望む未来、望む社会をつくっていく。そういう活動をして**

**いかないといけません。**

**そう考えると、まずは政治をどう変えたら良いのか。これは会社でもそうですけど、「未来にこういう政治・社会・経済をつくりたい」という目標が出てくると、今やるべきことが見えてくる、明確になる。そういう意味では、国家にも会社にも個人にも理想が必要である。理想というのは先に掲げるものだから、ずっとずっと先のことだと思いがちですが、今生きている人間が理想を考えるんですから、理想と言えども現実のただ中にある。理想とは、今、現実を生きる力をつくる原理なんですよ。理想とか夢とか希望というのは、今を生きる力をつくる原理なんですよ。理想がなければ今何をしていいかわからない。夢がなければ我々は流されるんだ。目標がないと今何をするべきなのか判断できないんだ。だから会社なんかでも3年計画、5年計画とかいろんなそういう未来に目標を掲げて、そして数値目標を設定して、その数値目標を5年先に実現しようと思ったら今は何をしておかなきゃならんのか、ということを考えて、そして事業計画をつくるわけですよ。そういう意味では、未来とはまさに今を生きる力なんだ。理想とは今を生きる力なんだ。夢とは今を生きる力なんだ。目標とは今何をするべきか判断し、決めるという働きをするものが目標である。**

**残念ながら今の世界は、どういう未来をつくりたいのかということに対する考えが全く世界に存在しない。国家にも存在しない。混沌たる状況というか、時代の大転換期ということの意味なんですね。古いものが壊れていって、新しいものが出てくるという状況なんだけど、今の時代はまだまだ古いものが壊れていくということが多い。まだ新しい未来がなかなか見えてこない。皆どうしていいかわからないという戸惑いの中にある。これが時代の大転換期特有の意識であります。やっぱり時代というのは、時間の流れに従って動いておりますので、今は古いものは壊れていくという崩壊現象の方が多いですが、崩壊には方向性がありますので、崩壊する現実の中で古い価値観が壊れていくという状況の中に自分の身を置いて、そして方向性をよく見つめるならば、確実に崩壊現象のただ中には未来への予兆があるという風に言わなければならない。**

**この未来への予兆を早く掴んだ人間が、新しい時代をつくり出していく指導者になることができる。そういうことになりますから、だからどういう風にしたら我々は今を的確に生きる力をつくっていくための理想とか意味とか、それらをどういう風にしたら我々はつくり出すことができるのかということを具体的に考えていかないといけません。そのためには、今の時代は近代から次の新しい時代へと変わっていくという大転換期ですので、今の時の流れというのは、脱近代というキーワードに従って動いていると考えなければなりません。**

**大きな変化の時代というのは、ついつい変化対応能力が大事だと言われるんですけど、変化対応能力というのは変化があって、その変化にどう対応したら良いのかを考えるもの。変化があってから何かしらの変化にどう対応したらいいのかということを考えているようでは、なかなか問題の連鎖から脱却できない。問題の後追いという風な生き方になっていく。原理的変革が求められている激しい変化の時代において、本当に我々が価値ある生き方をしていこうと思ったならば、変化対応能力ではなくて、時流独創という「時の流れは俺がつくる」という気構えが要求されてきます。時の流れは俺がつくるという生き方をしようと思ったならば、次の新しい時代という流れの中で、どういう方向性というものが今存在するのかと言ったら、そのキーワードは「脱近代」。これを我々は知る必要がある。脱近代というのは、あらゆるものが近代から脱却していく。近代的**

**なものとは違ったものになっていく。時代の流れのキーワード、方向性がちゃんと掴めたなら、近代とは違う、新しい在り方とはどういうものなのかというものが、だいたい想像がつくかと思います。**

**建築業界の未来ということを考える上でも、建築の歴史というものをずっと振り返っていけば、確実にその時代時代によって建築の様々な様相・内容は変わってきてると思うんですよ。そういう中で脱近代の建築とは何なのか。これを考えていけば、近代とは違う方向性が建築業界の未来として見えてくるはずなんですよ。それは具体的に皆さん方がやらなければならないことなんですけども、その参考として、政治・社会・経済をどう変えるか、具体的な現実の問題というものを通してお話をすることで、皆さん方が建築業界の未来を「時流独創」していく力をつくっていってもらいたいと思います。**

**政治の未来・理想はどうしたらわかるのか。政治も脱近代という方向性で動いてますから、近代の政治は政党政治、とういうことは、今の政治は脱政党という方向性では動いてるんだ。将来は政党のない政治が出てくるんだ。だから我々がつくっていかなければならない政治は政党のない政治の世界。それを目標にして今の政治を変えていかなければならない。そういう流れがはっきりと見えてくるわけであります。政治家にそういう方向性の変化を国民が要求しなければならない。何で政党があってはならないのか、なんで政党を無くさなければならないのか。それは政党が存在する限り、政治家は政権争い、権力争いというものをもっぱらの仕事にして、自分たちが政権を取らないと自分たちの思う政治はできないから、どうしても政治の世界は政権闘争・権力闘争に明け暮れてしまって、国民不在、国民のことをあまり考えない。そして国民のためよりも自分自身が選挙に当選するため、自分たちの党が政権を取るために必死になって活動する…そういう形になってしまう。つまり、今の政治の混乱は、政党があるから混乱しているんですよ。政党の存在が政治家の人間性を醜いものにしている。政党があるからお互いに醜いけなしあいをして、批判、言い争って相手を責め立てる。政治を堕落させ、政治を混乱させているのは、まさに政党の存在である。**

**混乱した政治から立ち直るためには、とにかくまずは政党を無くさなければならない。政党のない政治をつくるということを考えなければなりません。実際問題、政治というものは国民の意識を反映しなきゃならんと言われていますが、国民の過半数、半数以上は支持政党なし、なんですね。無党派層が半分以上。だから本当に政治が国民の意識を正しく反映するのであれば、すでに政治の社会は政党のない政治になってなければならないんですよ。国民の過半数が無党派層で、支持政党なしという状況になっているのですから、それを正しく政治が反映すれば、政治には政党が存在しないという状況になっていなければならない。まだそうなっていないということは、政治がいかに国民の本当の意識を反映していないかを如実に物語ることになっているわけです。**

**ではどうしたら我々は、政党のない政治をつくることができるのか。そのことを考えなければならない。政党のない政治というものをつくろうと思ったならば、政党政治の根底にある原理はなんなのかを考えると、それは多数決原理なんですよ。数さえ集めたら勝てる。量の原理。数を集めるために金で買収する。数を集めるために芸能人やスポーツ選手を無理矢理政治家にする。自分たちの党の数を増やそうとする。これが数の暴力という悪しき政治の現実が生まれてきた根本の原因です。本当に我々が政党のない政治をつくっていこうと思ったら、まずは多数決原理を破壊**

**しなければならない。多数決原理が存在する限りは政党政治がなくなることはない。近代社会は、数の原理によって皆支配されている。今の時代は物質的な原理から、量から質へと価値観を変えつつある。価値基準を変化させる状況になってきております。そういう意味では、量の時代の政治から質の時代の政治へと変えていくということも考えなければならない。数に支配されないような政治の在り方をつくっていかなければならない。**

**では多数決原理という原理とは違う、物事を決めていくための方法、質を重視する方法はなんなのか。学問的に言うと、なかなか厄介で複雑な内容になってしまって説明するのに時間がかかるんですけども、簡単に言ってしまったら、どうしたら多数決原理から脱却できるか。まずはいろんなテーマで議論をするわけですけど、確実にいくつかの意見が出てきてグループができてくる。大事なことは、あるテーマのもとで話し合ってできた同じ意見の人が集まったグループというものは、決して固定化してはならない。また違ったテーマが出てくれば、また違った人と同じグループになるという可能性もありますので、一旦できたグループを固定化してはならない。一回限りのグループであるという原則をつくらないと、政党は無くなりません。グループを固定すれば政党になるわけですから、まずグループは一回限り。他のテーマで議論をすればまた違った人と同じグループになる。決して個人を拘束することになってはならない。**

**そして、質を重視するとはどういうことなのかと言ったら、あるグループは200人の人がいて、あるグループは100人の人がいて、また違うグループは50人の人がいて、また違うグループは20人の人がいる。そういうグループができた場合、量で数で物事を決めたならば、数の多い考え方が通ってしまって、数の少ない考え方は抹殺されてしまって、全く取り上げられないということになってしまう。これが量によって判断された結論であります。その判断にならないためにはどうするか。少数意見も最後まで多数意見と対等の関係で話し合いができるという構造、システムをつくっていかなければならない。200人のグループからも100人のグループからも50人のグループからも、各グループから同じ数だけ代表者を出してくる。そして同じ数だけ出てきた代表者で話し合いをする。そういうステージをつくることによって、量が支配する状況から脱却して、大・少数意見も同じ価値、同じ力を持ったものとして対等の関係で話し合うことができる。**

**そして話をする時にはどういう話し合いをするか。自分の考えで相手の考えを論破して、自分と同じ考えの人をたくさんつくろうとする…これは量の時代の政治なんです。新しい質の時代の政治は、どういう話し合いをするか。違った考えの人からお互いに学びあって、違った考えから学ぶことによって自分の考えを成長させていって、成長しているからだんだんだんだん意見が近づいていって結論が出る。そういうやり方が質の時代の新しい結論の出し方。こういう議決方法を統合的集約原理といいます。いろんな意見、違った意見というものを統合していく。今の時代は統合がキーワードになっていますから、いろんな意見を統合していって、そしてだんだんと考えが成長していくことによって、考えが集約されていく。これが統合的集約といいます。結論を出していくのが新しい政治である。こういう政治のことを合議政治といいます。我々はこれから量の時代の政党政治から質の時代の合議政治をつくっていく。政治の大変革を成し遂げていかなければなりません。**

**単に政治のことだけではなくて、会社の中でいろいろ話し合う場合も統合的集約という原理を用いて話し合わないといけません。というのも自分と違う意見は敵ではないんだ。自分と違う意見**

**というのは、自分の考えにおいて欠落した部分を補うために自分と違った考えが出てくるんだ。違った考えは、お互いに相手の考えにおいて欠落した部分を補うために出てくるんだから、全ての考えを統合することによって、本当の生きた現実に対応する結論が出てくると言うことができます。**

**これを仏教では、「三人寄れば文殊の知恵」という風に昔から言われています。「三人寄れば文殊の知恵」。自分と違う考え方というものを寄せ集める、三つの違った考え方を統合して結びつけることによって、一個の人間の限界を超えた仏の知恵が湧いてくる。なぜ、三人なのか。一人称二人称三人称という構造において成り立っている。俺だけの判断では主観的で偏っているんですよ。また相手の判断だけでも偏っている。また第三者の目で見ただけでも偏っている。自分の判断と相手の判断と第三者の判断、この三つの判断を統合して、結びつけると初めて生きた現実が正確に掴める。偏りのない、一個の人間の限界を超えた、仏の知恵をつくり出すことができる。**

**そういう意味で、本当に我々が勝ち負けを争う政治ではなくて、すべての意見は他の意見の欠落した部分を補うために出てくるんだという構造を理解すれば、一個の人間だけの偏りはなくなっていき、生きた現実を的確に捉える・正しい見解に到達することができる。これは会社の会議、議論においても使わなければならない。また家庭の中でも。人間が助け合って生きていく新しい時代の議論の仕方が、統合的集約原理であります。早く我々は勝ち負けを争う多数決原理から脱却して、皆が力を合わせて助け合って生きていく統合的集約原理を使って、議論ができる自分をつくっていく努力をしていかなければなりません。政治の変革は政治だけではない、自分自身の人間性の成長、能力の成長が必要。また家庭、世界の平和にも繋がっていく重要な課題であります。なぜ統合的集約を覚えないといけないのか。それは考え方が違うというのはどういうことなのかということを原理からわかっていないといけません。**

**考え方の違いというのは、生まれてから後に後天的につくられてくるもの。生まれながらに考え方が違うということはないですからね。どのようにして考え方の違いができてくるのか。体験が違うと考え方が違ってくる。また経験が違うと考え方が違ってくる。また持っている知識や情報が違うと考え方が違ってくる。それから物事の解釈の仕方が違うと考え方が違ってくる。さまざまな人生の出会いの違いというものも考え方の違いができてくる。どういう災害と出会ったか、どういう事件と出会ったか、どういう事故と出会ったか、どういう人物と出会ったか、どういう本と出会ったかなど、さまざまな出会いによって人間の考え方や価値観は随分と違ってくるものであります。すなわち考え方が違うということは、相手が自分とは違う体験を持っている、経験を持っている。あるいは相手が自分とは違う知識情報を持っている。または相手が自分とは違う物事の解釈の仕方をしている。または相手が自分には無いさまざまな人生の出会いを持っている。そのことによって考え方の違いや対立が出てくるんだ、と言うことができます。自分には無い、欠けたるところを補うものを持っている。**

**だから、自分の考えの中に相手の体験を取り入れたら、成長を遂げることができる。経験を取り入れたら、相手の知識情報を取り入れたら、相手の解釈を自分に取り入れたら、また相手の出会いとか事件、出会いというものを自分の中に取り入れたら…自分の幅が出てくるかもしれない。そう考えれば、お互いに学び合い、高め合う、そういう風なことができるわけであります。夫婦ももっともっとお互いに学びがなければならないし、学び合い教え合うことが、共に生きていくという**

**ことのためにすごく大事な原理であります。全社員がお互いに学び合い教え合う統合的な関わりを持てば、会社全体の判断が高度化していきます。こういう実践がちゃんとできないと離婚の激増は止まりませんよ。宗教戦争、民族戦争もなくなりませんよ。違うからと言ってムカついていては、永遠に対立はなくならない。対立を乗り越えて、皆が力を合わせて生きていくというこれからの時代においては、お互いに学び合うという精神が非常に大事なことになってきます。統合的集約というお互いに学び合うことによって成長していって、意見がだんだん近づいていって結論が出る…そういうやり方が、まず政治において実現しないと、現在よりもより素晴らしい正義の在り方というのをつくっていくことはできません。**

**時代の変化、政治の変化の必要性を建築に適用すればどうなるのか。近代の建築は一体何なのか。そうすれば今は脱近代という方向性で動いているんだから、それは一体どういうことなのかもわかってくる。将来はどういう建築の思想、在り方になっていくか。皆さん方はプロとして、専門家として考えてみてもらいたい。そうすれば確実に全世界がこれから目指していくべき建築の未来・方向性・理想というものが明らかになってくるはずであります。ちょうど一時間半経ちましたのでここで休憩入れて、また後半の話をさせてもらいたいと思います。どうもありがとうございました。**

**それでは後半の話に入ります。**

**次は経済です。経済社会というものをこれから我々はどういう風に変えていかなければならないのか。どういう理想を持って我々はこれから経済活動をしなければならないのか。元の経済も脱近代という方向性で変わっていくという原理で考えるとどうなるか、ということなんですけど。近代は資本主義経済というものが近代経済の中心になるシステムでした。ですから今の経済社会は脱資本主義という方向性で変わっていくんだ。そういう方向性で変わっていくんだと我々は考えなければなりません。ということは、資本主義ではない新しい経済の在り方が当然、未来に見えてくるわけですよ。なぜ我々は資本主義を乗り越えて脱却していかなければならないのか。資本主義経済というのはお金を目的にする経済であって、システムの中で働いていれば誰でも金のために働かされるという状況に引きずり込まれるんですね。そのことによって多くの人が金に困って首をつる。また不況になったら必ず借金で苦しめられて、多くの人が職をなくして路頭に迷う。そういう状況が出てくるわけであります。だけど経済というのは、本来人間が幸せになるためにつくったシステムなんですよ。だけども現実はその経済によって人間が地獄の苦しみを味わわされてしまっている。そして資本主義経済というのは、好況時が短くて、長い鍋底不況と言われるようなものを体験しなければならない。そういう繰り返しが資本主義経済の歴史でした。**

**それで我々は考えなきゃならんのは、経済は人間のためにあるので、人間が経済のためにあるのではない。人間が経済の犠牲になってはならない。本当に人間のための経済、人間が本当に幸せになることができる経済というのは、一体どうしたらできるんだろう…それが今の経済学の課題であります。まず考えるべきことは、経済は人間のためにある。人間が経済のためにあるんじゃない。だから人間が犠牲になってはならないんだ。これがまず原則です。では、人間のための経済というのを考えるためにはどうしたらいいのか。人間と経済の接点とは何なのかということを考えていかなければならない。人間と経済の接点とは、労働である。労働とはなんなのかを考えることによって、我々は資本主義経済とは違う新しい経済システムの可能性、方向性を見出すことがで**

**きるかもしれない。そう考えていくと、人間の労働というものが経済価値を持つためには、どういう内容が必要か。最低限度、人に喜んでもらえるような仕事の仕方をすることが人間の労働が経済価値を持つ、金を生むという基本原理である。**

**なぜならば、人に喜んでもらえないような仕事の仕方をしたのでは、それは経済価値のない労働。人に喜んでもらえないような仕事の仕方をしたのでは、「もうあんな人に頼まない」となる。仕事がなくなる→会社が潰れる。これでは経済活動は成り立たない。まずとにかくは、人間の労働が経済価値を生むためには、その人の労働が人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができているかが大事である。ということは、全ての職業は基本的に、その仕事に従事する人間を人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間に成長させるという役割を持っている。全ての職業というものは、まず人に喜んでもらえるような仕事の仕方をするということが基本。だから全ての職業はその仕事に従事する人間を人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間に成長させるんだ。そういう働きを持っている。**

**仕事をする第一の目的は、その仕事に従事する人間が人に喜んでもらえるような仕事の仕方のできる能力と人間性を持った本物の人間になること。その結果として、人に喜んでもらえた証として金が入ってくるという順序になる。労働の目的は金ではない。自分自身を本物の人間に成長させること、鍛え上げること。これが第一番目の目標なんだ。それが見えてくるわけであります。労働とはなんなのかを原点に帰って考えてみることによって、我々は資本主義経済とは違う新しい方向性を持った経済の在り方を考えることができる。これから我々はどんな仕事をする場合でも、人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間に成長させてくれる働きを持っているんだ、とそのことを意識しながら我々は仕事をしなければならない。自分自身が本物の人間に成長したそのレベルに応じて、金はどんどん入ってくるんだ。結局、金というものは自分自身がどの程度の人間に成長したかによって、金が入ってくる量は決まるんだ。**

**こういう経済の在り方というのは、人格主義経済と言うんです。経済というものは、人間に人間の格をつくって、人間を本物の人間に成長させる、という働きを持っているんだ。そして我々は、経済活動をしなければ人間として本物にはならないんだ。人間が本物になるためにはどうしても経済活動をする、金の苦労をするということが、人間が本物の人間に成長していくために欠くことのできない重要なこと。これが人格主義経済。経済活動は人間の格をつくるための活動。そう考える新しい経済の在り方であります。**

**では、なぜ経済活動というのは人間を成長させる、本物の人間になるために必要なのか。ふたつ大事なことがあります。人間の本質に触れる、人間の実態を知るということが一つ。社会の本質、社会の実態に触れるということが二つ目。人間が人間として本物になるためには、人間と社会の実態に触れる、本当の姿に触れる、人間と社会の本質に触れる。それがないと、人間は人間として本物に成長するということはない。人間は社会的存在だと言われていますから、社会の中ではじめて人間として生きていくことができる。子どものときに狼にさらわれてしまって、狼の習性を覚えてしまったら、狼少年ケンになってしまう。人間の社会において人間の手によって育てられるから人間になるんだ。**

**人間と社会の実態に触れる、本当の姿に触れる、人間と社会の本質に触れるとはどういうことな**

**のか。社会がどんなに恐ろしいものなのか、どんなに醜いものなのか、どんなに怖いものなのか、どんなに素晴らしいものなのか、人間がどんなに恐ろしいものなのか、どんなに醜いものなのか、どんなに怖いものなのか、どんなに素晴らしいものなのか。人間と社会の本当の恐ろしさと本当の素晴らしさに命を触れる体験を持って、初めて命は人間として磨かれることになるんだ。**

**命というものは命に痛みを感じることができるような体験を持たないと、本当のことはわからない。真実がわからない。どうしたら一体我々は人間と社会の本当の恐ろしさと素晴らしさに命が触れる、という体験を持つことができるのか。そのためには弱肉強食・利害打算の働く娑婆世界の中でプロとしての仕事を持って、生活を懸け、人生を懸け、命を懸けて働くという労働の仕方をする必要がある。弱肉強食・利害打算が支配する娑婆世界の中で、生活と人生と命を懸けて働く。必死になって働くことによって我々は必ず世の中の悪と出会う。また善とも出会う。そして地獄のような恐ろしい体験を持つ。また人間の美しい心に触れる。また感動的な体験をする。そうしてだんだんだんだん命が人間としての本当の生き方というものを身につけることができるわけであります。**

**現実の半分は悪だ。常に悪への備えというものをしていなければならない。また社会には様々な恨みや妬みだとか、そういう人を陥れるような画策をする人間が必ずいるんですよね。そういう中で自分自身の人生を生き抜いていかなければならない。悪の中に身を置きながらも悪に染まらず、人間としての正しい道を歩んでいく生き方をするためには、何度か危険な状況に遭遇しながらも、どうしたら不幸な状態にならずに現実の社会を生き抜いていけるのか。そういう問題に我々はぶち当たる。**

**いろいろと職業の世界には誘惑がある。金に支配されて、あるいは地位や名誉に迷っていろんな悪事を体験するような状況に引き込まれる可能性もずいぶんある。そういう風な人間としてのいろんな体験を持つことによって、自分を鍛えてくれて、そして強い心・生き方をつくってくれるわけです。とにかく、人間が本物と言われる生き方をするためには、現実の社会の中で様々な悪と善に出会うことを通して、我々はその中を悪に染まらず生きていく力を少しずつ自分の物にしていく。そして人の道に外れない生き方ができるようになるわけですよ。人の道に外れて悪に染まれば警察沙汰になって牢獄にぶち込まれることになるかもしれない。そんなことも体験としてあるかもしれない。そういうところで命は鍛えられるんです。よく経済界で言われることですが、経営者として人間が本物になるためには、倒産か投獄か大病。このいずれかを体験しないと経営者は人間として本物にならないと言われています。実際には倒産する必要もないし、投獄される必要もないし、また大病になる必要もないんだけど、それに匹敵するほどの苦しみというものを人生において体験しないと、人間は本当の人間としての底力を持った本物の人間にはならないんだ、という風に言われているわけであります。倒産して投獄されて大病になって、そういう状況から這い上がってきた人間だけが、人間としての本当の底力を獲得して、人生をたくましく強く生きていく、そういう人間になれるんだということなんです。**

**とにかく、我々がこれからつくっていかなければならない経済社会は、金のために働くという経済の在り方ではない。我々は金の苦労をすることによって、自分自身の人間性を鍛えていく、磨いていく。そして金を手段として自分を磨いて、悪に染まらない。そういう強い生き方ができる人間性をつくっていく。仕事をする目的は、自分自身を人間として鍛えるため。仕事をすることを通して初めて我々は人間として本物になれる。仕事を通さないと人間と社会の本当の恐ろしさと素晴**

**らしさに命が触れる体験は持てないんだ。金の苦労をしないと、本当の強さ、人間としての本当の底力は出てこない。そういう意味で、経済活動も人間として自分を成長させていくための手段である。経済は手段だ。目的は人間として本物になることだ。自分を鍛えるために我々は会社に就職して仕事をするのである。自分が就職した会社を通して自分を人間として鍛えていく。会社の中で起こる様々な仕事上のトラブルや人間関係の問題というものは、自分を人間として鍛えてくれる。全ては自分自身を成長させるために起こってくる問題だ。そうすることで、我々は問題から逃げない。問題を通して自分自身を鍛えて、その覚悟、腹の据わった生き方、仕事の仕方ができてくることになるわけです。**

**こういう精神というのは、日本には江戸時代に商道という働き方があった。いわゆる金儲けを手段にして、自分自身の人間性を鍛えていく。なぜ自分自身を鍛えることになるのか。商いをすれば人に買ってもらわなきゃいかんから、だから買ってもらえるような商品は扱わなきゃならない。また買ってもらうためにはそれなりに同業他社との違い、優れたところを自分の中につくっていかなければならない。また売掛をすれば売掛金の回収ができないこともあったりなんかして、様々な人間関係のトラブルに巻き込まれていってしまうということもある。そういう全てのことが自分を鍛えてくれる。強い生き方ができる自分をつくってくれる。そういうことになるのが商道。金儲けを通して自分の人間性を磨き、自分の人格を鍛えていく。柔道というのは柔という格闘技を通して、人間性を磨くこと。茶道というのも茶を飲むという行為を通して、人間性を成長させる。華道も美しく花を生けることを通して、自分自身の人間性が磨かれていく。**

**こういう精神というのは欧米にはない。職業を通して金儲けを通して、自分の人間性を成長させようという意識は欧米にはないんです。だから新しい経済の在り方である人格主義経済というのは、日本人が欧米に教えていかなければならない。また日本以外のアジアは長い間欧米によって植民地化されておりましたから、日本以外のアジアはほとんど皆欧米化され、欧米的な価値観に基づいて今日まで生きてきました。また日本でも戦後は欧米の価値観を押し付けられてしまって、そして日本独特の精神性が破壊されてしまった。だけれど、我々には血の中に流れる伝統と歴史がある。そういう意味では、我々は自らの民族の伝統の中に息づいている商道という、金儲けを通して自分自身を鍛えていくという生き方、経済活動の在り方をアジアに、世界に教えていく。金のために働くんじゃない。何のため仕事をするんですかと言ったら、自分自身を本物の人間に鍛えたいから仕事をするんだ。経済活動をしないと人間の命は本当には鍛えられないんだ。そういう風な考え方で経済活動というものをやっていく。そういうことをこれから我々は世界に教えていく。そういう責任があるわけであります。そうすることによって経済が人間性を破壊するような形にはなっていかない。経済活動をすることによって人間性が成長していく、そういう新しい経済社会をこれからつくっていけるようになるわけです。どういう気持ちで仕事をするのか。どういう気持ちで働くのか。もう一度よく振り返って考えてみてもらいたいと思います。とにかく、脱近代という流れの中で経済を考えたら、経済は資本主義から脱資本主義へ。そして将来は人格主義経済という在り方が実現されることになっていくわけであります。**

**今度は社会を考える。社会の新しい時代の在り方とは何なのか。近代の社会は民主主義社会ですから、脱近代という方向性であらゆるものが動いてるとするならば、社会は脱民主主義という方向性で動いてるんだ。民主主義社会からよりもっと素晴らしい新しい社会の在り方へと社会は変化しようとしているんだ、と考えなければならない。なぜ民主主義社会ではだめなのか。どうして**

**脱民主主義という方向性で社会は変わらなければならないのか。その理由は何なのか。民主主義社会は権利を主張するという精神を根底に生まれてきた社会なんです。だから民主主義社会は権利を主張する人間だけが得をして、権利を主張しない人は損をするという構造になっています。本来、権利には義務という果たすべき役割があるんですけども、でも封建時代から近代社会に進んでいく道筋で義務を強く言うと、なかなか封建的な支配された状況から脱却できないので、義務はあまり言わないで、権利ばかり主張するという精神が民主主義社会における基本的な姿勢として出来上がりました。だから本来、権利というのは義務を果たした人間に権利が与えられるもの。だけど民主社会は、義務を果たさなくても権利はあるんです。そして国民の義務として税金を納めることがありますけど、皆税金を喜んで納めるということは無い。節税するということを皆がしているんですよ。やりすぎちゃって脱税になってしまう。それほどに義務を果たさない努力をするんです。人間関係においても権利は主張する。更に義務も必要なのに…。本来相手に自分が果たさなくてはならないのに、「俺に対する義務を果たしてないじゃないか」と言って、相手を責めるみたいな道具に使ってしまっている。相手が自分に対する義務を果たしていないと言って相手を責める。また自分の権利を主張して相手からいろんな物を奪い取ろうとするというのが実態であります。権利を主張し合って、相手を責めるという構造になっている。どうしても民主主義社会は対立という構造になっている。**

**だから、民主主義社会の政治は与党野党が責め合う。民主主義社会の経済は経営者と社員が責め合う。民主主義社会の裁判は検事が弁護士が責め合う。民主主義社会の夫婦はお互いに権利を主張し合って責め合う。皆、責め合う構造で民主主義社会は成り立っている。だけども、実際問題不完全な人間がお互いを責め合うのなら、生きるに耐えない地獄と化す。そういう意味でそんな醜い、薄汚い社会で良いのかというのが、今の反省点であります。しかし、多くの人がこの民主主義社会が最高の社会であって、まだ多くの国が民主主義になっていない。だから、皆がならないといけないという考えを持ってしまっている人もいると思いますけど、原理から言うと民主主義社会は決して理想的ではない。大きな欠点は、責め合うところにある。民主主義社会は、権利を主張するような自己中心的で身勝手な人間だけが得をして、権利を主張しない謙虚な人は損をさせられてしまう。これが民主主義社会の実態であります。不完全な人間がお互いを責め合うのなら、生きるに耐えない地獄と化す。今まさに社会全体がそういう対立構造の中で地獄を味わう状態になっているのが、現実ですよね。**

**そこで、これから我々が目指していかなければならない社会、すなわち不完全な人間が安心して生きられる社会とはどういう社会なのか。それは、不完全を責め合うのではなく、お互いが認め合って許し合って共に助け合って生きていくのが、我々人類が目指していかなければならない未来の新しい社会の在り方であります。こういう社会の在り方を何と言うか、それを互恵主義社会。お互いに尊敬する。お互いに敬愛する。そういう互恵主義社会というものが、これから人類が目指していかなければならない社会の理想である。責め合ったら地獄だ。許し合って生きる。これがこれから夫婦関係でも決して忘れてはならない。お互いに短所欠点がある。それをお互いに補い合って許し合って認め合って助け合って生きる。そこに夫婦というものの生き方の基本がある。責め合えば地獄、許し合ったら天国だ。これが大きな社会構造の違いであります。民主主義社会は責め合う社会。我々がこれから目指していかなければならない社会は、互恵主義社会。許し合って生きる社会。許し合うというのは、愛に基づく社会。理性によって責め合うのではない。愛によって許し合って助け合って生きる。そういう新しい理念を持った社会を我々はこれからつくっていかな**

**ければならない。**

**社会というものには必ず理念があって、目標にするものがある。近代社会、民主主義社会の理念は自由と平等であった。確かに近代社会の民主主義社会は、自由と平等を理念にすることによって社会も発展し、人間も成長してきた。だけども、今や近代社会の自由と平等は、人間と社会を成長させる力をなくしてしまって、自由を主張するがゆえにお互いに対立をし、平等を主張するがゆえにお互いにナマケモノになるというか、成長意欲や労働意欲をなくしてしまう状況にあります。これからは民主主義社会における権利と義務に代わる新しい理念をつくっていかなければならない。**

**これから我々が目指す互恵主義社会はどういう理念を持つ社会にしていかなければならないのか。これから人類が目指すべきものは平和である。ひとつの理念は、平和だ。もうひとつ近代社会においては物質的には豊かになったのに、人間性は全然成長していないと言われている。そういう意味では、人類が目指す理念のふたつ目は、人間性の進化である。残念ながら人類の人間性は低落していて、品格が落ちっぱなし。それが現状に対する批判であります。そういう意味でこれからは、平和と人間性の進化を目指すべき。平和とは言っても世界平和だけではない。家庭、社会、組織…そしてお互いに。**

**先ほどから言っているように考え方が違うということは、相手は自分にないものを持っているんだ。違うということは自分の考えに欠落した部分を相手は補うという立場で存在しているんだ。そう考えていくと、対立を超えて助け合って、力を合わせて生きていく。そういう愛に基づく社会をつくっていく。それが平和という理念から生じてくる人間の生き方の変化です。責め合って勝ち負けを争うんじゃない。争えば必ず勝つ者と負ける者とが生まれてくる。しかし、力を合わせたら共に成長できる。こういう違いが、民主主義社会と互恵主義社会の在り方の違いです。だけど平和とか人間性の進化は、ある意味でヨーロッパ的な概念、言葉なんですね。これからはアジアが燃えて、アジアが発展して、アジアの価値観が世界を支配するという状況になっていくわけですから、新しい時代の理念もアジア的な価値観、表現をしなければならない。アジア的な精神と言うと、先ほども申し上げたように道の思想が挙げられます。インドで生まれた仏教。中国で生まれた儒教は人の道を説く。老荘思想は天の道を説く。また日本には神道という宗教がある。これは民族宗教ですけどね。そういう意味でアジア全体に共通する理念は、道という言葉で表現できる。だから次の新しい時代の理念もアジアの言葉にしなければならない。そうなるとどう表現されるかと言うと、平和は和道。人間性の進化は教育によってなされるのではなくて、本人の気付き。気付かないと本当の成長はない。この気付きのことをアジアでは悟りと言う。人間性の進化には悟りが必要。そういうことから、悟道。次の新しい社会の互恵主義社会の理念は、和道と悟道。これが新しい時代の目標と言えます。**

**また社会には社会規範というものがあって、これは民主主義社会では権利と義務。残念ながら権利を主張し合うことで対立を生んだ。また義務も自分は果たさないで人に要求するものになってしまった。そういうことから、新しい互恵主義社会においてはどういう社会規範、社会を生きるための基本的な精神、気持ちを持っていないといけないのか。それは権利に道義を意識する必要がある。人の道に外れてはならない。人の道に外れてはならないという意識を持って社会を生きる必要がある。道義という言葉が民主主義社会における権利に対応する社会規範である。そして義**

**務に対応するものとして新しい互恵主義社会においては、どういう社会規範、意識を持たなければならないか。敬愛という言葉である。道義と敬愛。人の道に外れてはならない。お互いに人間として相手を尊敬し合って、そして助け合って生きる。そういう精神が敬愛という言葉です。これが義務に対応する言葉であります。権利と義務から道義と敬愛。これらを意識に持って我々は社会の中で人と関わらなければならない。これがいわゆる脱近代という方向性で政治の未来、経済の未来、社会の未来ということを考えた場合の感性論哲学の立場からの結論であります。**

**その他に文化というものもあって、近代の文化を理性文化と言って、あらゆるものにおいて合理性を求める、合理化を追求することをやってきた。その結果として人間性が破壊されて、血の通った温かな心が消える、という状態になってしまった。これから人間性を取り戻さなければならない。また血の通った温かな心遣いを皆ができるようになっていかなければならない。そういうところから、今は脱理性という方向性で文化、精神文化が変わっていこうとしている。これから我々が求める新しい文化の在り方は、感性文化である。感性を原理にした新しい文化の在り方をつくっていかなければならない。感性を原理にした新しい文化とは、脱理性から感性が出てくるので、その意味においては理屈を超えるものが愛と言われますので、感性文化というのは愛を原理にして生きるものと言えます。理屈を言って説得する。理屈で全てを解決するのではなく、大事なものは理屈を超えた愛だ。でも、残念ながら今の人達は同じ考え方の人としか一緒にやってはいけない。価値観が違ったら一緒に仕事ができない。相手が自分と同じように考えてくれないと、その人を好きになれない状態になってしまっている。これは明らかに人間が理性の奴隷となって、理性的にしか生きられないという状態になっている証である。だけども、これからは個性の時代を生きていかなければならない。**

**個性の時代というのは、考え方が違っても一緒にやっていける。価値観が違っても一緒に仕事ができる。宗教が違っても戦争にはならない。そういう時代をつくっていかなければならない。そのためには考え方の違う人と一緒にやっていこうと思ったら、どうしても理屈を超える力が必要だ。その理屈を超えるものが愛。愛とは考え方が違う人と共に生きる力だ。愛とは価値観が違う人と一緒に仕事をする力だ。それがこれから我々がつくっていく人間性豊かな具体的な姿です。そして我々は理屈じゃない心が欲しいと叫んでいる。理屈はたくさんだ。自分が本当に求めているのは心だ。心が欲しいんだ。これが、これからの人間の欲求であります。理屈よりも心を大事にする。これも感性文化の大きな目標になるわけですね。理屈も大事だけど理屈よりもっと大事なものは心だ。会社というのは仕事のつながりと役職のつながりだけで動くみたいな合理的な組織になっているんですけど、これからは人間の本質は理性ではない心だ、と言われる時代になるわけだから、会社においても一番大事なのは心の繋がり・結びつき・通い合い。これらを会社の団結力の土台に据えなければならない。そしてその組織の土台の上に仕事の繋がりを乗せて、その上に役職の繋がりを乗せる。三段構え、三次元構造でこれからの企業は運営されなければならない。これも感性文化のひとつの在り方である。**

**理性文化というのは、事実や知識や情報を非常に大事にするんですけど、そのことによって物事の意味や価値や値打ちを感じるという精神が非常に衰弱していってしまう。あまり意味を感じない、素晴らしさを感じない、感じる力が衰弱してしまっている。人間の心は意味と価値を感じる感性で、人間は意味や価値を感じないとやる気にならない。価値や素晴らしさを感じないと命に火がつかない。理性で仕事をしていたら無理矢理にやらされている感じでしか仕事ができない。本**

**当に我々が命を燃やして幸せな気持ちで仕事をするためには、意味や価値を感じて燃えないといけない。感じたら燃える。考えていたのでも燃えられない。そういう意味でも我々は感性というものを生きる原理にして、仕事をする、生活をするということをもっともっと考えないといけない。心を大事にする、愛を大事にする、そして感じるということを大事にする。意味を感じる、価値を感じる、素晴らしさを感じる、感動する、問題を感じる。そういう感性の働き方を根底に据えながら、理性を手段能力として生きていくという時代をつくっていかなければなりません。感性文化というものの具体的な内容であります。**

**我々が私と言っているものは理性ではない。それは欲求である。感性から湧いてくる欲求が俺なんだ。欲求がないということは俺がないということなんだ。だから欲求のない人は、人から与えられたことをさせられてしまう。欲求の無い人は奴隷にならざるを得ない。人間として誇り高く生きていこうと思ったら命から湧いてくる欲求が大事だ。欲求のない人間は自分の人生をつくれない。したいことがあってこその人生だ。欲求が湧いてきて初めて命は燃えるんだ。欲求なしには命は燃えられない。欲求だけでは野獣である、動物である。人間として生きていくためには理性を使わなければならない。大事なことは人間が理性を支配して、使いこなして生きることを覚えなくてはならない。そのためには、近代人のように「理性という能力は神から与えられた完全な能力だ。理性は完全無欠のロックンローラーだ」という意識を持ち続けていてはならない。そうではなくて、理性というのは合理的にしか考えることができなくて、有限で不完全な能力だという意識改革をする必要がある。そして、命から湧いてくる本音・実感・欲求…これこそまさに宇宙と繋がった命の働きであって、それを大事にして、自分を騙すことなく正直に生きる。しかも、皆と仲良く生きていける。そういう生き方を模索していかなければならない。そのためには本音と実感を大事にしながらも理性を使いながら、自分と違う考え方や価値観の人と一緒にやれるかを考える。理性を手段能力として。そうすることによって、命から湧いてくるできることなら皆と一緒に仲良くやっていきたい、という欲求が活かされることになっていく。**

**職業というものは、したいことをしないと成功しない。しかしそれだけではわがままで身勝手。したいことをしながらもどうすれば他人に喜んでもらえるか、それを考えると職業が生まれてくる。理性を原理にした冷たい、批判的な対立するような文化から、感性というものを大事に愛と心を大事にする文化へ。許し合ってお互いに助け合って、そして物事に意味や価値を感じるという力を養っていく。そのことによって人生は豊かさ、温かさというものを持ってきて、意味や価値を感じると血の通った温かな心が出てくるわけです。意味を感じないと我々はやる気にならない。価値や素晴らしさを感じないと命は燃えない。血の通った温かな心遣いは、物事の意味や価値を感じるという精神から生まれてくるわけであります。**

**理性的には嘘を言ってはいけないというのは大事な道徳なんですけど、人間は不完全だからついつい状況に追い詰められて嘘を言ってしまうこともあるわけです。その時に「嘘を言うたから嘘つきだ。信じられない」というのは理性の判断。感性で考えたら、「人間は嘘を言いたくて言っているのではない。言いたくないんだけど、不完全なるがゆえの弱さで言ってしまうこともある」と考える。自分に置き換えたらすぐわかると思いますが、「どういう風に言ったらいいかな」と思っていろいろと考えてしまう。「正直に言ってしまったら相手にも悪い」。そういう思いやりがあったりするんですよね。正直な人間は正直に言ってしまうから、そこに心遣いがなくなってしまう。もっともっと我々は、嘘を言う人間の心遣いの温かさやどんなにその人が苦しんで考えたかとい**

**うことをわかってあげることが大事です。でも、嘘を言って良いわけではない。嘘を言った人に対して理性的に反応して、その相手を責めるのではなくて、「いろいろ悩んで心遣いをしてくれた君のその温かい気持ちはよく分かる。でも嘘は良くない。今度困った状況になったら俺にも相談してくれ。どんな問題でも一緒に考えて一緒に乗り越えて人生を生きていこう」と言ってあげるのが、人間としての血の通った温かな心がある感性を原理にした生き方と言えます。とにかく、どうしたら血の通った温かな心遣いができるか、これをもっともっと考えていかないといけない時代に入ってきます。**

**最後の大遷都の実現、という課題なんですけど、今東京に日本の首都があるわけですが、東京が日本の中心になってからもう400年以上経っています。日本の歴史を考えれば、遷都をすることによって新しい時代をつくってきたという流れになってます。日本の古代は、現在の奈良県、大和地方であった。日本の中世は今の京都、平安遷都。武士の時代になって鎌倉へ。次は足利尊氏がまた京都の室町へ。しかし京都はもうすでに平安時代に遷都していた。この2回目に京都に都を持っていったら突然乱れて、戦国時代になってしまった。そこで豊臣秀吉がきて、徳川家康と繋がっていく。そして日本の中心になって400年以上経ってしまっている。日本の国が新しい時代に入ろうと思ったら、東京からまったく新しいところに日本の中心を移さなければならない段階になっているわけです。なぜ日本が政治においても経済においても混乱して、そして世界から軽く見られてしまうような情けない状況にあるのか。それは東京に都があるから。東京というところは日本を発展させる力を無くした風土なんだ。人口面においても飽和状態、空気や水の面においても飽和状態、ゴミの処理にも困ってしまっている。国を発展させることはできなくなってしまった。だから今度日本が新しい時代に入って、大きな発展を遂げようと思ったら、もう一度新しいところに日本の都を移すという遷都をセントセントバーナード。そうしないと、日本の新しい力が湧いてこない。これは環境を変えると新しい潜在能力が湧いてくる。環境を変えると新しい遺伝子にスイッチが入って、新しい力が湧いてくると、これは遺伝子研究からいってもそう言われております。日本がこれから本当に新しい時代に入っていこう、新しい発展をつくっていこうと思ったら、歴史の流れから見ても日本の都を移すという大遷都をしなければならない。**

**遷都をするということは、建築業界にとってはまさに千載一遇のチャンスだ。箱ものを建てないといけない状況になりますから、建築業界が大繁栄を経験する時代になってくるわけです。その意味においても建築業界や不動産業界の方々が、団結して「日本に新しい都をつくろう」という提案を政治に向けてやっていって、そして組織力の力で建築業界と不動産業界の業界人が力を合わせて新しい国をつくる。先頭に立って動かなければならない時代がやってきておるわけであります。これは日本の歴史以外にも世界を見ても世界の歴史というのは、確実にその中心になるほど風土を移し替えていくことによって世界史はつくられてきました。今日の人類の文明は、アフリカ中部の大地溝帯というところから始まったんですけど、そこから北部のエジプトに行き、メソポタミア地方、バビロニア地方、ペルシャ、ギリシャ、イタリア、ヨーロッパ、イギリス、アメリカ…と、その時代の中心を担う風土は移り変わっていく。そのことによって歴史はつくられてきた。これからアジアが燃える。アジアの入り口は日本だ。そして日本から中国へ。中国からインドへ。これから世界の中心は移動していく。世界史も日本史と同じように風土を移し替えながら時代をつくり、歴史を積み重ねてきた。歴史の基本原理です。日本が新しい時代に入って、より素晴らしい発展をしようと思ったら、どうしても東京から全く新しいところへ首都を移すことを考えなれればなりません。これも重要な国民全体のテーマになってくる話です。**

**ではどこへ遷都するか。これは今回の東北の大震災・大災害がそれを示唆する条件を持っているわけですけど。大地震のないところ、大津波のないところ、そして原発の心配のないところを条件にして考えていくと、中国地方5県。広島・山口・島根・鳥取・岡山の5県が日本の新しい都となるべき風土だということが見えてくるわけです。日本海というのは、大陸棚によって形成されていますから、太平洋岸のようにプレートの潜り込みがない。日本海側は案外大きな地震がない。福井、新潟、秋田、青森はたびたび大きな地震があったところなのでそういうところは避ける。原発を考えると中国地方には島根原発一発なんです。二基あるんですが、一基は休眠中で動いていない。そういう状況でしかもあまり地震もない、大津波もない。案外と日本の国の中で一番安全な風土だということができる。なぜ中国地方が首都なのか。これは、これから人類が平和を求めていかないといけない。平和の原点と言えば広島だ。その広島を日本の首都にすることによって、日本人は世界平和を実現するための指導者としての役割を果たす。平和の指導者としての地位をつくるためにも広島へ。そして、広島を中核とした中国地方5県を首都圏とする。そういう形で日本の新しい未来をつくっていくことを考えたらいいんじゃないかと、感性論哲学の歴史観から考えているわけです。今日は新しい時代をつくるためにはどういうことを考えたら良いのか、ということのお話をさせてもらいました。どうもありがとうございました。**